日本郵便と佐川急便、浜松―東京間でトラック共同運送

#静岡 #東京 #関東

2023/3/23 5:00 [有料会員限定]

浜松をたち、東京到着後は郵便局と佐川の物流拠点でそれぞれの荷を下ろす（浜松市の浜松西郵便局ゆうパック分室）

日本郵政グループの日本郵便とSGホールディングス傘下の佐川急便は、浜松市から東京都までの間で共同運送を始めた。従来それぞれトラックを用意し2台で運んだのを1台にまとめて輸送効率を高め、二酸化炭素（CO2）排出量を削減。運転手らの残業規制が厳しくなる「2024年問題」を控えるなかドライバー不足の緩和にもつなげる。

日本郵便と佐川急便は21年に協業を発表し、22年から長距離の「幹線輸送」を相互に委託する形で共同運送に取り組んでいる。東京―福島県郡山市間では郵便の荷物を佐川のトラックで運び、佐川が使う関東―九州間のフェリー輸送にも郵便の荷を加えた。第3弾として2月に始めた浜松―東京間では、佐川の荷を郵便のトラックで運ぶ。

佐川急便から預かった荷物とともに日本郵便の荷も載せトラックで東京へ輸送（浜松市の浜松西郵便局ゆうパック分室）

日本郵便の静岡県西部の宅配便拠点・浜松西郵便局ゆうパック分室（浜松市）で、郵便の10トントラックに郵便と佐川急便の荷物を合わせて積む。平日の午後9時半ごろに浜松をたち、4〜5時間後の翌日午前2時半ごろ新東京郵便局（東京・江東）で郵便の荷を、同3時ごろには佐川の物流拠点「Xフロンティア」（同）で佐川の荷を下ろす。

浜松―東京間を日本郵便や佐川急便が各自のトラックで運ぶ際に生まれていた車内の空きスペースを、共同運送に切り替えることで少なくできる。トラックの運行台数が減ることでCO2排出量は年間で45トンほど削減される。両社がともにトラックに積む荷物が少なく運行時間帯も重なる区間を探し出し、今回のマッチングにつながった。

日本郵便と佐川急便はいずれも宅配便を手掛けるが、それぞれの物流効率についての考えの違いから現場の運用方法は異なる。例えばトラックへの荷物の積み方では、郵便がかご台車に荷物を載せたうえで台車ごとトラックに積むのに対し、佐川は荷物を直接トラックに積み込む。共同運送を実現するには運用方法を合わせる必要がある。

浜松で日本郵便から提供を受けた台車に佐川急便の荷物を積み、郵便に東京までの輸送を委託する

浜松―東京間では日本郵便のかご台車による運用に合わせた。浜松で共同運送の前日までに郵便が空の台車を佐川急便の拠点に届け、佐川は自社の荷物を台車に載せておく。当日は郵便が佐川から荷入り台車を受け取ってトラックに積み、自社の拠点を経由して東京へ運ぶ。佐川の拠点で荷入り台車を下ろし、前日に使われた空の台車を引き取る。

一方で日本郵便が佐川急便の荷物の幹線輸送を受託するため、佐川が開発したアプリを郵便の職員が使って荷物の発着状況などを逐一佐川に連絡する。2月1日から計30便以上の共同運送を実施しているが現場にかかる負荷も少なく、運行の遅れなど目立ったトラブルはないという。今後は年末の繁忙期も見据え円滑な運用の継続に努める。

日本郵便の運転手は浜松からの共同運送を担った後、東京から別の運送便で浜松へと戻り、行き帰りとも多くの荷物を運べる。佐川急便は浜松―東京間は郵便に委ねつつ、運転手が別の運送便に携われる。個々の乗務負担は変わらないが効率を高められるのは大きい。2024年問題がもたらすドライバー不足への対応にも寄与しそうだ。

【関連記事】

・大手スーパー4社、物流連携を検討　施設の共用視野

・物流「24年問題」解決へ一役　新興勢がサービス続々

・物流2024年問題待ったなし　大量輸送に知恵、廃業連鎖も

・動く物流版ダイナミックプライシング　2024年問題に一石

ニュースレター登録